
水面の月 ~ The Reverse Of The Girl ~

シンイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水面の月 The Reverse Of The Girl

【Nコード】

N4994W

【作者名】

シンイ

【あらすじ】

突然、中世の日本のような世界に放り出された一人の男子高校生。しかし、異世界での生活は決して楽しいものではなかった。

『水面の月』のもう一つの話。「影映り」の向こう側、“彼”の世界が舞台です。

『水面の月』月下辺のお話になります。

この小説だけでも楽しめるような話作りを心がけていきますが、別連載『水面の月』を読んでいただくと、より世界観が分かると思

います。

彼のブローグ

ザーザーと激しい雨がもう二日も降り続けている。空はどんよりとした重たい雲がかかり、目の前は真つ白とも真つ黒とも言えない曖昧なグレーで煙っていた。激しく打ち付ける雨音が蹲る少年の聴覚を支配している。おかげで、こんなに雨音がうるさいのに彼は静寂に包まれていた。

少年はほとんど崩れかけている空き家の中にいた。戸口の近くで膝を立てて座り、じっと動かない。フーツフーツと息を殺して外の様子を伺っていた。きらつと反射した緑の眼鏡が鋭く光る。ぎらぎらとした荒々しい感情を押し殺すその姿は、まさに手負いの獣のようだった。彼の隠れるぼろい空き家は、天井の板が所々腐り落ちており、雨漏りというのがおこがましいほどの水が入ってくる。しかし、制服の紺のスボンもシャツも濡れて全身に張り付いていれば、そんなことは微塵も気にならなかった。

外の気配を探りながら、少年はこの半月のことを思い出していた。

突然だったのだ。本当に。あつという間に自分の取り巻く景色が変わった。歴史の資料集の中で見た、中世の日本のような町並みに放り出されたのだ。持っているのはジャージの入ったスポーツバッグだけ。周りの人間はまるで映画村から来たような、時代錯誤な奴等であつとも話は通じなかった。言葉は同じ日本語なのに、会話ができない。部活帰りの少年を彼らは化け物が現れたと言って大騒ぎを始めたのだ。その後は一対多勢の鬼ごっこだ。鎌やら鍬やら、物騒なものを掲げられながら鬼の形相で追いかけられる。どっちが化け物だと思いつながら、見慣れない土と木でできた町を、右に左に逃げ回り、くたくたになったところで、老夫婦に匿われた。彼らは、親切に寢床と質素な食事を用意してくれた。疲れきっていたので、明日このわけの分からない事情を話そうと眠りについたが結局それ

は叶わなかった。

ふと物音に眼が覚めると誰かが近寄る気配がする。不審に思つて寝たふりのまま様子を見れば、丁度老夫婦が自分に向かつて包丁を振り下ろすところだった。間一髪、身体を横に捻りそれをよけると眼鏡だけ掴んで身一つで外に飛び出した。真つ暗闇の中を必死に駆け抜け、どこに向かつているのかもわからないまま一晩中走り続けた。

それから地獄の日々である。

今まではどこにでもいる極普通の高校生だったのに、ここでは近寄るのも怖い化け物だった。新しい集落へ行つても、そんな自分にまともに取り合つてくれる人間はどこにもおらず、ただ、集落の隅のほうでじつとしている他なかった。

そして、問題だったのが食べ物の確保である。荷物も財布もあの老夫婦の家に置いてきてしまったし、どちらにせよ自分の持つていたお金が使えるとは思えなかった。彼らは皆穴の開いた丸い銭で売買をしている。近くで見たこと無いのでいまいち判断つかないが、あれは銅銭というやつではないだろうか。現代の金も、この世界の金もないのでは買い物で食い物を買うことはできない。しょうがないので水とその辺の野草で我慢することにした。しかし、現代つ子に食べられるものと毒草とを見分けられるわけが無い。すぐにはずれを引いて、三日三晩ひどい腹痛に苦しんだ。その時に見た母親に看病される夢は、泣いてしまうほど温かくて優しい悪夢だった。

この半月でいつも思ふのは、何故自分がこんな目に遭わなければならぬのかだ。周りから奇異と怖れの目で見られた時。半日近く追いまわされた時。老夫婦に殺されそうになった時。毒草にあたつて死ぬ思いをした時。飢えに耐えられず、人様のものに手を出してしまった時。いつも、いつもその言葉が頭の中で激しく暴れだす。今だってそうだ。町中の人間にまた追いかけている。彼らは本気で自分を追い出しにかかったらしい。何故、何故と思ひながら、

ぐつと呻いて脇腹を押さえた。汚れた白いシャツに血が滲んでいる。いくつか物を投げられたから何かが当たっていたのだろう。気が付かなかった。しかし、なんてことはない。これも日常だ。これが日常だ。

もう帰りたいなんて思わなかった。帰れなくてもいいから、もっとまっとうな生活がしたかった。

朔の日の終わり 1

春日部千次郎幸望公が第八代当主になられたそうだ。今市中を流れる噂はもっぱらこれであつた。ようやく長かつた跡継ぎ問題のいざこざも終わり、空いたままだつた鹿角城城主の席も埋まる。しかし、それを噂する市民たちの声は暗く、表情も落胆の色が隠せなかつた。この新しい殿様は先代の第五子で、母親は正室である。まだ二十代で若く、人柄が良い。ここまでなら、なんの申し分もないのだが、ただ、その人の良さが彼の最大の短所なのだ。彼の領民は、この幸望公が家臣たちのただ傀儡でしかないことを知っていた。家臣が白といえば白に、黒といえば黒という男である。もし、腹違いの第四子や、第六子ならばあの城に巢食う古狸どもと渡り合えただろうに、何故最悪の人選になつたのか。領民たちは、ただ涙するばかりである。彼の評判は良くも悪くも近隣諸国に届いている。これからは厳しい時代になる、と誰もが唇をかみ締めた。

なんとか半月持つた。今、満尋が思うのはそれだけである。崩れかけた空き家に身を隠しながら、獣のように生きてまだ半月。学校帰りにタイムスリップしてから、小説のようないいことなんて何もない。ただ、命だけがなんとか無事である。血と泥で汚れた制服はボロボロで、さらに雨にも降られたので全身びしょびしょだ。服の破れたところからはいくつもの傷が覗いている。碌に手当てもせず不衛生なままだったので、化膿しているところもあった。

（あいつら、もう行つたか？）

もう何度目になるのか、この間やつてきたばかりのこの町でも満尋は追われていた。正直、ここの連中とは関わりたくないが、山は獣が出るし食べるものがなかった。いや、食べ物はいくらもあるのだろつが、道具も知識もない満尋には手に入れないのだ。だから、何度追いかけられても町から離れることはできなかった。

（くそつ、俺だってホントはこんなことしたくないんだ）

満尋は適当に引つ掴んできた乾物を握り締めた。この盗んだ僅かな干し肉と魚の干物で食い繋いでいくしかないのだ。

ぱしゃり、と雨音に混じって土を踏む音が耳に入ってきた。途端に満尋は緊張し、息を潜めて自身の気配を殺す。満尋は命の危険が迫ると、人間がいかに早く環境に順応するかを体感していた。この半月で、五感は一瞬鋭敏になった。もともと近眼なので視力はあまり変わっていないが、暗闇の中でも薄っすらともものを見ることができるようになった。そして、今一番頼りになるのは聴覚だ。ぱしゃ、ぱしゃ、と移動する足音に意識を集中させて自分との距離を測る。大丈夫、まだ遠い。変わったのは五感だけじゃない。あちこち逃げ回ったおかげで、身体もずいぶん軽かった。単純に不摂生で余分な肉が落ちた所為もあるが、体の使い方というものがわかった気がする。肉と魚を結んでいる縄を口にくわえて、できるだけ音を立てないように、地面を這うような低い体勢で崩れた壁まで移動する。野良猫みたいなこの姿が、受験勉強に追われているただの高校生ではなくなってしまったことの証明だ。耳は相手との距離を測り、頭の中では壁に開いた穴から逃げる計画が目まぐるしく展開している。満尋は、確かに自分が変わってしまったことを感じていた。

すぐ近くでピタリと止んだ足音に満尋は警戒を強めた。今身を隠しているところは、ちょっと覗いたくらいでは見えないはずだが、中に入ってこれられれば間違いなく見つかる。この時代の人々が盗人にどんな罰を与えるか分からないが、死ぬ可能性も考えておかななくてはならない。自分は一度、彼らに化け物といわれて追われたこともあるのだ。絶対に捕まるわけにはいかない。

足音はしばらく家の前をうろろした後遠ざかっていった。

満尋は溜め込んでいた息を吐き出すと、壁に背を預けて脱力した。危なかった、危機一髪である。今まで緊張していた分、開放感は大きい。ゆっくり目を閉じて、このまま今日は寝てしまおうと思っていると、

「やはり、いたか」

壁の穴から男が顔を覗かせて言った。

完全に油断していたため反応が遅れた。すぐに駆け出そうとするが、男が壁から手を伸ばして満尋の腕を掴むのが先だった。今まで出会った町人達と違い、男は鍛えられた締まった身体をしていて、とても振りほどくことができなかった。

「こら、逃げるな。別に捕まえに来たわけじゃない」

「現に今捕まえてるだろ」

男はそのまま身をかがめて空き家の中へ入ってきた。何とか逃げようとする満尋が言い返すと、笑って「そうだな」と腕を放した。放された腕をさすり男を観察すると、意外と若かった。声が落ちて着いていたので結構歳がいつていると思っていたが、たぶんまだ二十代だろう。もしかしたら、自分と二、三しか違わないかもしれない。小袖に括袴という姿は町人達と変わらないが、袴の上から褐色の帯を巻き、腰には太刀を差している。重心のぶれない真っ直ぐな立ち姿は、剣道をずっと続けていた現代の友人にそっくりだ。もちろん、この男の方がずっと完成されていて、隙がないが。こいつからは逃げない方がいいだろう、と判断した満尋は、警戒態勢を崩さぬまま男と話をしてみることにした。

「捕まえに来たわけじゃないなら、何の用で来たんだ？」

「何、化け物退治を請け負ってきたんだが、どうやら依頼主の勘違いのようだな」

「あんたは、俺が人に見えるのか？」

「違うのか」

まっすぐこちらを射る視線は真剣で、満尋がこちらに来て初めて受けるものだった。

「……違うない」

搾り出した声は、満尋の中にすとんと落ちてきた。そして、自分はずっとこれが言いたかったんだと悟る。静かになった満尋を見

て、男はまたふつと笑った。ああ、あれは人に向けてする表情だ。
そのままぐらりと体が傾いて、満尋は意識を失った。

朔の日の終わり 2

ヒグラシの鳴く声が頭の中に響いてくる。身体は温かいものに包まれていて、目を閉じたまま無意識に頬擦りした。だんだんはつきりしてくる意識に、それが布団だと分かると、満尋は勢い良く身体を起こした。

夕暮れの時の西日が部屋の中をオレンジ色に染め上げていた。視界がぼやけているが、ここがあのぼろい空き家ではないことは分かる。つるつるの板敷きの床には埃っぽさがなく、天井からは雨漏り一つしていない。布団から抜け出して立ち上がると、自分が制服ではなく白い浴衣を着ているのに気が付いた。そのまま開けっ放しの戸口へ行くと、部屋の外には縁側のような長い廊下があり、その向こうは塀に囲まれた庭だった。隣にも戸は閉まっているが同じような部屋があるようだ。なぜ自分がこんな所にいるのか理解できなくて、満尋は呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

しばらくすると、満尋の耳がみしみしと床の鳴る音を拾った。それが複数人の足音で、こちらに近づいていることを悟ると、よく見えない目で音のする方を睨み付けた。角を曲がって現れたのは二人の男だった。顔は判断できないが、彼らは一瞬立ち止まると手前を歩いていた男が声をあげた。

「お、もう起きたのか。調子はどうだ」

その声には聞き覚えがあった。あの空き家で自分を捕まえた人間と同じ声だ。それから、目覚める前の記憶が次々と蘇ってきて、自分が途中で気を失ったことまで思い出す。

「ここは……。俺をどうするつもりだ」

「まあ、待て。悪いようにはせん。部屋の中で話そう」

睨み付ける満尋を軽くいなし、男はそのまま部屋の中に入ってしまった。後ろを付いてきた別の男が、微笑を浮かべて中へ入るよう促したので、満尋はしかたなく二人に従った。さらに男は布団に入

るよう勧め、満尋もまだ体がだるかったので大人しくまた布団に戻った。

「話の前に俺の眼鏡を返せ」

かなりのド近眼なので無いと不便だ。枕元には置かれていなかったから、彼らが持つているのだろう。

「めがね？　なんだそれは」

「……レンズ、じゃない。透明な、とにかく俺が顔に掛けていたものだ」

なるべく外来語を使わないようにしたら、うまく説明できなかった。身振り手振りで伝えたら、

「ああ、あの変わった玻璃細工か」

と思い当たったのか、懷から丁寧に布で包まれたものを取り出した。玻璃が何なのか分からないが、それを受け取り布を開くと、見慣れた細い緑のフレームの眼鏡が出てきた。すぐにそれを掛けるとぼやけた輪郭がはつきりし、自分を捕まえた精悍な顔の男と、見知らぬ狐目の男が目の前に現れた。

「その　めがね　という精巧な細工をどこで手に入れたのか。いろいろ聞きたいことはあるが、先にお前の名を聞いておこう」

二人の男は布団の横に腰を下ろした。狐目の方は喋らないのか、話せないのか、話はもう一人に任せてにこにこしている。

「人に名前を聞くときは、まず自分から。じゃないのか？」

悠然と構える男たちの態度が気に食わなくて、素直に答えることはしなかった。向こうに話の主導権を握られたくない、というものがある。

あばら家で会った男は、くつと口の端をあげて笑った。

「威勢がいいのは悪くない」

ヒタリ、冷たい何かが満尋の首筋に当たる。

「だが、時には従順になることも必要だ」

殺気とでもいうのだろうか。男からびりびりとした鋭利な空気が発せられた。男の横に置かれていた太刀が、いつの間にか抜かれ満

尋に当てられている。頂の毛がぞわりと逆立って、冷たい汗が流れた。息を呑むこともできずに固まっていると、刃は満尋のどこを傷つけることなく鞘に収められた。

「お前の名は何だ」

再び尋ねられた問いに、苦さを噛み締めながら自分の名を答えた。空き家であつた男は、満尋の様子を見て満足そうにすると、自分は鴻池宇木衛門こうちうきえもんだと名乗った。狐目の男は佐久間六郎というらしい。

「ここはあの町から一里ほど離れたところだ。俺たちは？衆しゅうで、俺がその頭だ。ここはその拠点だな。お前を連れてきたのも、仲間になつてもらおうと思つてのことだ」

一里。満尋は以前読んだ歴史小説を思い出した。細かい数字は忘れたが、だいたい四キロメートルくらいだった気がする。それが、遠いのか近いのかはいまいち分からないが。それに？衆というのも初めて聞く言葉だ。仲間にしたいと言っているが、一体どんな集団なのだろう。

「まあ、今日はそこら辺にすんべ。あんましうるせーと傷に障っかな。また明日だべりやえーべ」

ここで初めて狐目の男、佐久間六郎が口を開いた。優男風の見た目とどこかの訛りが少しミスマツチだった。

傷と言われて改めて自分の体を見ると、ところどころに包帯が巻かれていた。それを知覚すると、今まで忘れていた痛みがぶり返してくる。

「てーした傷はねっけど、化膿してっからな。おめー、てけとーに放つてたろ。明日また薬塗ってやつから、今日はもう寝とけ」

六郎は立ち上がると、宇木衛門とともに部屋を出た。宇木衛門はまだ話したそうだったが、六郎が有無を言わさず連れ出したので「明朝にまた来る」と言つて、部屋を後にした。

遠ざかる足音を聞きながら、このまま逃げ出してしまおうかという考えが頭をよぎったが、久しぶりの柔らかな布団の感触に、自分の意思に反してまた夢の中へと落ちていった。

朔の日の終わり 3

翌朝、宣言どおりに宇木衛門と六郎が朝餉を持ってやってきた。

この時代にやってきて初めて食べるまともな飯である。人に刀を当てるようなやつから食事を貰うものか、と思っていたが、美味そうな匂いに腹の虫が我慢できなかった。膳に乗せられた玄米、貝の味噌汁、煮魚を残さず胃に納めると、なんとも言えない幸福感に満たされた。

食事が終わり膳を下げた後は、六郎から傷の手当てを受けた。古い包帯を取り、新しいものに六郎は持つてきた木箱に入っていた薬を塗って、腕や腹、足などに手馴れた様子で巻きつけた。その薬がまたとても臭くて、宇木衛門も顔をしかめて部屋の戸を全開にした。その後、着替えなどの身支度を終えて三人は昨日の続きに入った。二人は、満尋が袴の着方を知らないことに驚いていたが、気さくな六郎が着付けを手伝ってくれた。

「では、？衆の話からか」

部屋に三人座り込んで、宇木衛門が話し出した。

「？衆というのは、宇木衛門が集めた自衛集団のことらしい。十代から二十代の若者が中心で、町や村の依頼で見回りや街道に出る賊退治などを請け負っているのだそうだ。その背景には、最近春日部の当主に就いた幸望まことが関係しているらしい。

「あの人は政にはとんと向かない人だからな。おまけに、家臣の多くは戦で領を広げようと謀計をめぐらしている奴らばかりだ」

宇木衛門は新しい領主が領民を守ることに期待はしていない。そればかりか、逆に危険視しているようだった。

「町の間人も同じ考えだ。？衆が強くなれば、俺たちを材料に交渉もできる。俺たちで惣をつくるんだ」

宇木衛門はぐっと拳を握った。そこには、彼の強い決意があるのだろう。「惣」というのは確か、室町時代にできた自治権を持つ

共同体のことだったはずだ。教科書に良く出てきた「惣村」は、村の防衛や年貢の徴収を自分たちで行っていたそうだが、？衆はその自衛を請け負う集団になろうということだ。満尋は話を聞いて窃笑した。「惣」が出てきたということは、今は室町時代ということだ。今まで人と関わらなかつたためにこの世界の情報を得ることができなかつたが、彼らからはいろいろと聞き出せそうだ。

「俺からも一ついいか。今は足利の誰が將軍をしているんだ？」

年号で答えられても分からないので、將軍の名前を聞いてみた。

これなら、おおよその見当はつく。しかし、返ってきた言葉は意外なものだつた。

「足利？ 兼定かねさだというものがいたと思うが、あの家は將軍職についたことはないぞ？」

「おれも聞いたことねえべ。そもそも、將軍なんてーした力はねつからな。今は大名があつちこつちに領国をつくつてんべ」

大名が領地を支配しているということは、もう戦国時代に入ったということだろうか。室町幕府の足利家を知らないのは気になるところだが。

「じゃあ、尾張の織田信長は？」

「知らん」

その後も、武田、上杉、今川と名だたる戦国武将たちをあげていったが、誰一人知っていると答えたものはいなかつた。さらに、その時に一緒に挙げた尾張や、甲斐といった地名にも聞き覚えはないという。これには満尋もお手上げだつた。ここは、過去の日本ではないのだろうか。

「ここは、別幕わくれの国だ。お前くらいの歳なら聞いたことはあるはずだが」

満尋は旧日本の地名もほとんど覚えている。しかし、別幕なんて国は聞いたことが無い。

「ちなみに別幕は、三静みしず、帖許はけもと、挟河さかわの三国に囲まれている。これも聞いたことが無いか」

「……ない」

どれも初めて聞く国名だ。これは、過去の日本ではないことが確定しそうだ。では、自分は一体どこに来てしまったのだろう。

「おめー、家族はいねーのか？」

「いない。この世界のどこにも」

膝の上に置いた拳を白くなるほど硬く握り締めた。日本史は得意だから、これからはそれでうまく立ち回れると思っていた。しかし、それはできない。

「俺は、？衆の頭としてお前を正式に仲間に入れるつもりで連れてきた。先ほども言ったが、俺は？衆を強くしたい。だが、？衆はまだ駆け出した。もっと人が要る」

すっかり威勢を無くした満尋を、宇木衛門は真っ直ぐ真剣な眼差しで見つめた。昨日出会ってから、彼の視線と声は少しも揺らぐことがない。

「俺は、どこの誰かも分からない、盗みを働くようなヤツですよ」

「知っているさ。異国の輸入品よりも珍しいものを身につけて、当たり前前の常識を知らないひどい世間知らずだ。それに、お前は盗みを働いたことを悔いているようだが、あの程度の盗みならどこでも日常茶飯事だ。皆それぞれ事情を抱えているからな。このご時世どうしても、まともに生きていけない人間は山ほどいる」

彼は何か思い出すものがあるのか、目を瞑り一瞬沈黙した。六郎も静かに彼の言葉を聴いている。

「それでも、根の腐っていない奴ならば信じようと思う。お前は誰より手はかかるが使えるさうだ。まあ、この辺は俺の勘だがな」

そう言って宇木衛門は笑った。それは、自信に溢れた気持ちのいいものだった。

「カリスマってあんたみたいなやつのことだろうな」

きつと意味は分からないだろうが、それでも口に出していた。今まで、ずっと細い綱の上を渡っていたようなものだったが、今ようやく地に足が着いた気がする。

満尋は、今まで楽にしていた胡坐を正座に正し、宇木衛門の方を向いた。そのまま手を突いて床に頭を擦りつけ、
「よろしく願います」
と、一言だけ口にした。

上弦に問う 1

？衆のすりに加わってから五日ばかりが過ぎた。あれから満尋は何度か体調を崩したが、今はほとんど回復し、新しい生活に少しずつ慣らしているところである。

太陽が昇る頃にはすでに身支度を整え、井戸へ向かう。

満尋は六畳一間の部屋に移り、そこで二人の若者と同室になった。一人あたりの空間がかなり狭くなるが仕方が無い。二人とも満尋と同じ新入りで、初めは気まずいものだったが、二日、三日と経つうちにだんだんと打ち解けることができた。

井戸に行くと先に部屋を出ていた同室の二人が顔を洗っていた。軽く挨拶を交わして釣瓶を落とす。井戸で水を汲むというのは中々大変で、一日使っただけで手の皮がずる剥けてしまった。それを見て、同室の二人には貴族の女みたいだと笑われたが。

「おはようさん、満尋。今日は庭の掃き掃除だつてよ。かつたるいよなー」

顔を洗い終わっても、まだ大あくびをしているのは同室の一人、勘吉だ。

「しょうがないですよ。当番なんですから。あたしだって本当は嫌なんですよ」

そう返すのは十壺とこち。彼も同室だ。勘吉はあつちこつち跳ねた髪を手櫛で適当に一括りにし、ぱんつと頬を叩いた。反対に十壺は丁寧に髪を梳いている。腰ほどまである黒髪は、梳くだけでも大変そう

だ。

「毎朝ご苦労だな」

「まあ、あたしの家は男も女も髪を大事にしましたからねえ。あなたも伸ばしたらどうです？」

満尋は男が髪をだらだら伸ばすのに違和感があったが、ここでは短い方が少ない。どんなに短くても紐で結べるほどには長いのだ。

十壺はたいして苦とは思っていないようだが、満尋には面倒に思えて仕方が無い。

「いつも思うけど、そうしてつとまんま女みてえだな」

勘吉が呆れたように言った。十壺は体の線も細くてどこか中性的だ。さらに、柔らかな物腰がそれを助長させている。対して勘吉は身体を動かすのが大好きで、この三人の中では一番体格がしっかりしている。見た目通りの性格は良くも悪くもおおらかで、たいていのことはごり押しで通そうとするのは、この数日間でも良く身に沁みだ。これで自分より歳が一個上なのだから驚きだ。

「さあさ、朝餉の時間に間に合いませんよ。今日の朝餉当番には京太郎さんがいますからね。遅れたら抜かれてしまいます」

身支度を終えた十壺が、満尋と勘吉の背を押して歩き出す。十壺は満尋の一つ年下なのだが、この中で一番しっかりしている。勘吉が、そりや大変だといち早く駆け出して食堂へ向かった。

この？衆が拠点としている所は、もともとは寺だったそうではほとんど縁を歩いて移動する。まだ夏の終わりだからかまわないが、これから秋が来て冬になれば外を歩くのが厳しそうだと、建物を見ながら思った。しかし、建物自体は立派なものだ。屋根を支える垂木の並びに、格子窓のついた板壁、敷地を囲む塀は白漆喰が美しい。煌びやかではないが、質素な佇まいを満尋はほんの少し気に入っていた。宇木衛門は古くなった寺を改装したから大した事ないというが、文化遺産に住んでいるような気分だ。

「おおーい、こっちこっち。おめーらおっそい。どんだけ待たせんだよ」

食堂に行くほとんどの衆徒が集まっており、その中で満尋たちに気付いた隣室の二之助が大きく腕を振っていた。二之助は？衆の中では一番年下で、今年で十三になるのだそう。二十歳前後が多い？衆の中でも物怖じすることなく振舞い、みんなからは弟として可愛がられているようだ。満尋とは部屋が隣同士ということもあり、

勘吉、十壱と四人で一緒にいることが多い。

奥の厨からお盆を受け取り、食事当番の者からご飯とおかず、汁物をそれぞれ受け取る。二之助が空けてくれた場所に腰を下ろして、食事を始めた。テーブルも椅子もないので皆思い思いの場所に座り、床の上に直接盆を置いて食べる。日本の食事の作法では碗を持って食べるのが許されているが、確かにこれは手に持たないと具合が悪い。テーブルに慣れた身としては、少し不便に感じてしまうが。

「満尋たちは今日何するんだ？」

かつかつと飯を忙しそうに掻き込む合間に二之助が問う。お行儀が悪いと十壱に注意されると、食べる方に集中した。？衆では基本的に部屋ごとで仕事や訓練を行うので、日中は隣室の二之助と別行動になるのだ。

「今日は庭掃除をして……、その後は馬術を教えてもらう」

「ん？ お前馬乗れねえのか？」

山盛りの玄米を食べていた勘吉が満尋を見た。その驚きの視線を受け、満尋は勘吉を少し睨み付けた。馬なんて乗ったことも無ければ、近くで見たことも無いのだ。

「あたしも乗れませんよ。そもそも、あたしらの身分で馬を操れるあなたが特別なんです」

十壱の言葉に二之助も箸を持ったまましきりに頷いている。どうやら、馬に乗れないのは二人も一緒らしい。何故勘吉が馬に乗れるのかと聞いたら、村に馬借を営んでいた家があったのだと言った。馬借は現代でいう運送業のような仕事だ。

「ガキの頃よく乗せてもらってたからな！。俺が教えてやろうか？」

懐かしそうに笑う勘吉を、満尋は少し複雑な気持ちでみていた。？衆は自分のように宇木衛門に拾われた人間がほとんどだ。きつと明るく笑う彼にも、村に居られなくなってしまった事情があるのだろう。だからだろう。ここの人間は皆、人との距離の取り方が絶妙だ。触れられたくないことには踏み込んでこないが、だからといって他人に無関心でもない。満尋が上手くここに馴染めたのも、そう

いう人間ばかりだからだ。

「止めといた方がいいって。勘にいが教えたら、絶対習うより慣れるで散々な目に遭うに決まってるさ」

「あたしも同感です。基本は大事ですからね。別の方をお願いします」

なんだとお前ら！ と立ち上がる勘吉に、うるせえと別の場所から野次が飛ぶ。勘吉はしぶしぶまた座ったが、完全に拗ねてしまった。黙々と飯を口に運んでいる。その様子を十壺と顔を見合わせて苦笑すると、満尋は静かに食事を再開させた。

上弦に問う 2

敷地内の一角にある厩では、十数頭の様々な毛色の馬が飼育されている。小屋から首を出している馬はどれも人の背丈ほどしかなくて、思い描いていたものよりも随分と小さかった。勘吉は馬に慣れているだけあって、一頭一頭馬の鼻面を慈しむように撫でていた。十壱は邪魔にならないよう、長い髪の毛をくるくるとまとめている。

馬術の訓練といっても専門の人間がついて教えるわけではない。世話をしているものはいるが、馬に乗れる者が、乗れない者に指導をしているようだ。

今日満尋たちに指導をしてくれるのは、初日に会った六郎だ。

「おー、おめーら待ってたべ。おれが教えっからなー」

いつもの方言で迎えてくれた六郎は、にこにこしながら満尋たちを待っていた。頭の宇木衛門と一緒にいただけあって、彼もなかなか忙しいらしい。六郎とはあれ以来会っていないので五日振りに顔を合わせる。見知った人間に安堵した満尋とは反対に、勘吉と十壱は身体を固くさせた。

「勘吉は随分と達者みてーだかな、おれが教えんでもいーべ。きいいたのみつけて、飛ばしていーだよ」

「はあ、では失礼します」

一緒にいて数日経つが、初めて聞く勘吉の敬語はかなり違和感がある。ぎこちなく身体を動かして、勘吉はすぐに馬を選びにかかった。その様子を不審に思いつつ、乗馬初心者の満尋と十壱は軽く六郎から説明を受け、自分達も馬を選びにかかった。

満尋が選んだのは灰色をした葦毛の馬で、十壱は黄色っぽい河原毛を選んだ。勘吉はこげ茶の黒鹿毛を選んだようだ。どの馬も大人しく、優しそうな目をしている。しばらく馬と戯れた後、六郎から馬の背に乗る指導を受けた。

鞍をつけていない裸馬なので、乗るときは飛び乗るといった感じだ。ポニーほどの大きなのでなんとか跨ることができたが、サラブレッドのような大型馬では無理だったかもしれない。とりあえず、乗り降りだけを何回か練習していたところで、衆徒が一人六郎に走りよってきて何事かを伝えた。どうやら、緊急の用で六郎はそちらに行かなくてはならないらしい。

「すまんねーけど、ちいつと行ってくんべ。外出て左ん方行ったら、丁度いいところかな」

六郎は慌しく厩を出て行くと、残されたのは呆けた表情の三人だけだ。いち早く立ち直ったのは勘吉で、黒鹿毛を引きながら喜色満面の笑みを浮かべると、

「お？ これは俺の出番か？」

と言った。嫌な予感しかない。隣の十壱も顔を引きつらせている。勘吉はひらり、と馬に跨ると、満尋たちにもさっそく乗るように指示した。

「じゃあ、さっそく行くか！ 走らせっぞ、ちゃんとついて来いよ」

「ちょ、ちょっと待て！」

「あ、あたし達はまだ騎乗しか習っていないんですよ。先生でしゅう。ちゃんと教えて下さい」

ともすれば今にも走り出しそうな勘吉を何とか止めて、馬の扱いを請うてみた。馬の背に跨り、まずは歩かせ方からと十壱が言う。「大丈夫、大丈夫。馬は賢いからな」。歩けーって思えば歩くし、止まれーって思えば止まるって」

などと言い出した。そんなわけあるかっと思っ込みたかったが、馬を驚かせるようなことはしてはいけない、と六郎に言われていたので黙らざるを得ない。勘吉はそのままポカポカと門へ向かって移動を始めたので、追いかかねばと慌てると、驚いたことに満尋の葦毛もそれに倣って歩き始めた。

「あの人の言った通りでしたけど……。複雑です」

「……ああ」

門の外に出ると、左の方と言われたのでそちらへ向かうことにした。馬は手綱を行きたい方向に軽く引つ張るだけで、ちゃんとそちらへ曲がってくれる。満尋は揺れる馬の背から落ちないことだけに気をつけて、馬を歩かせていた。

六郎が教えてくれた道は、かなり険しい山道だったが馬はでこぼこの道も、急な斜面もなんなく登っていく。15分ほど登っていくと、道が開けてなだらかな平原に出た。

「おおー、ここなら走らせても大丈夫そうだな」

勘吉の言つとおり、そこでは何人かの衆徒たちが気持ちよさそうに馬を走らせていた。元気の有り余っている勘吉はともかく、満尋も十壱も慣れない乗馬であちこちが痛い。とくに尻が。うずうずしている勘吉に、「休憩してるから、好きに走って来い」と言つと、勢い良く飛び出していった。

馬から降りて、十壱と適当な木陰に並んで座る。馬はすぐ側で草を食んでいる。さらさらと涼しい風が汗ばんだ顔に当たって気持ちよい。天気も良いし、このまま寝転んだら最高だろうと思っていると、十壱がそういえば、と話しかけてきた。

「満尋は六郎殿と知り合いなのですか？ 随分と親しそうでしたが」「ん？ ああ、ここに来たときにいろいろと良くしてもらった。怪我の手当てもしてくれたし、それがどうかしたか？」

十壱は少し苦笑して、

「いえ、ただ六郎殿は？ 衆の補佐役ですからねえ。少し珍しくてそれにいろいろとお噂のあるお人ですし」

と言った。なるほど、確かに頭やその補佐についている人間と馴れ馴れしく話せるものはそういないだろう。それにしても、噂とは何だろうか。

「おや、知らないんですか？ なんでも仕えていた主を切り捨てたとか何とか。まあ、あたしも聞いた話ですけど有名ですよ」

この世界のことはまだ良く分らないが、主を切り捨てる、とは大変なことではないだろうか。あのいつもにこにことした明るい六

郎に、そんな噂があるとは驚いた。

「あの言葉訛りは、東の方にある反馬たんまの訛りでしょう。七、八年前に領主が若い家臣に殺されていますが、まさか、ねえ」

六郎の歳を聞いたことはないが、見た感じだと二十五、六くらいだろう。噂が真実味を帯びてきたが、本当に殺していたらその家臣の命はすぐに奪われているはずだ。

「六郎の歳と出身国を結びつけて、誰かが適当に流したんじゃないか？」

「ですよねえ」

勘吉がものすごいスピードで衆徒五人抜きをしているのを見ながら、そう言っしかなかった。

上弦に問う 3

いつまで座ってんだとやってきた勘吉により、再び馬の背に跨ることとなった満尋は、流されるまま勘吉主催の乗馬レースに参加することになった。

「だから、俺今日が初めてなんだって、聞いてるか？」

うんざりしている満尋を他所に、着々と準備は進んでいる。男ばかりで競争といえば燃えるもの。他の衆徒たちも巻き込んで、総勢十四人によるレースが始まろうとしていた。

「では、ここを一周して山道を一回りし、一番先にここへ戻ってきたものが勝ちです。山道は三又のところを左に折れれば一本道ですから、間違えないようにー」

十壱は真つ先に審判役を買って出て、このレースから離脱した。なんとも要領のいい奴だ。スタート地点に馬を並べて、合図がなるのを待つ。馬たちもなんとなく乗り手の意気込みが伝わっているのか、しきりに鼻を鳴らしたり、足踏みをしている。

「では、よい……」

ぴー、と十壱の指笛が高らかに鳴る。「はっ」と言うと同時に、どどどと土煙をあげて一斉に馬が走り出す。満尋も遅れまいと手綱を握り締めた。

結局満尋は下から数えた方が早い順位に終わった。まあ、初めてだし完走したことに意義がある、とマラソンのようなことを思う。一位は当然ながら勘吉だった。子どもの頃から乗り回していたというのは伊達でなく、二位とは圧倒的に差をつけてのゴールだったと十壱が言っていた。

そして驚くことに、このレースは頭の宇木衛門にまで伝わっていた。夕餉の席で、

「お前たち、今日は随分と面白いことをしていたようだな。今度は

俺も混ぜろ」

と、口元を緩めて言われたときは、皆で固まった。

風呂に入った後はもうすることがない。明かりを灯す油は貴重なため、暗くなればさっさと寝てしまうのが、この世界の常識だ。部屋の前の縁に腰掛けて、ぼーと月を見ながら火照った身体を冷やしている、勘吉が隣に座り込んできた。

「いやー、今日は楽しかったな。競馬^まなんて久しぶりだ」

「あんた、あつという間に見えなくなつたな。昔から一番だったのか？」

馬の出来が一頭だけ違うのではないかと思うほど速かった。そう言くと勘吉は、豪快に笑った。

「んなわけないだろー。俺はいつも二番だったさ。幼馴染に滅法速いのがいてな。そいつには結局勝てず仕舞いさ」

今なら負ける気はしないんだけどなー、と言う勘吉はやはり何か事情があるのかもしれない。今でなくとも、いつか聞けるだろうか。「そういうお前は、どんなことしてたんだけ？」

子どもの頃を聞いているのだろう。すぐに思いつくのがテレビゲームなのだが、上手く説明できないし、それだと少し寂しい。

「学校で野球……とか？」

口に出して、あつと思う。学校も野球も分からないに決まっている。首を捻っている勘吉に慌てて、学校は同じ歳の子どもが勉強したり遊んだりするところ。野球は棒と小さな鞆を使って遊ぶものだと伝えた。

「ふーん、羽子板みたいなもんか。じゃあ、今度そのやきゅうやろう」

「……遊んでる暇なんてないだろ」

明日はまた別の当番もあるし、剣術、槍術、後々は鉄砲も使えなくてはならないらしい。そして、その合間合間に簡単な仕事も貰うそうだから、遊んでいる時間なんてほとんどないのだ。それでも勘吉は諦めきれないのか、できる、できないと問答を交わしていると

すつと戸が開いて十壺が顔を出した。

「二人とも煩いですよ。明日も早いんですから、もう寝てください」
それだけ言つてまた静かに戸が閉まる。

「お前は俺の母ちゃんか」

そう勘吉が呟いたが否定はできない。満尋も同じことを思った。
すると中から「外で寝たいのですね。どうぞどうぞ」という声が聞
こえたので、慌てて部屋に入り頭を下げた。まだ夏の終わりとはい
え夜は冷える。締め出されてはたまらない。

自分の布団を広げて横になると、久しぶりに現代のことを思い出
した。家族はどうしているだろう。学校は。友達は心配してくれて
いるのだろうか。いくら考えても答えは出てこない。こちらから向
こうの様子など知る術はないのだ。いつか勘吉のように、現代のこ
とを懐かしいと思いながら語る日がくるのだろうか。そうならなけ
れば良い。湯冷めしたのか、布団の中でぶるりと体が震えた。

十五夜逢瀬 1

連日続く厳しい鍛錬に、満尋を含めた新米？衆はくたくただった。新入りの初仕事が近づいてきた為に、鍛錬のレベルが一気に上がったのだ。さらに、最近は読み書き算盤など勉強の方も加わって、身体だけでなく頭も酷使している。同じ言葉を話しているとはいえ、書き方には大分現代と違いがあるのは分かっていたから、一人遅れてしまうことが不安だった。しかし、筆を持ったことの無い者は以外にも多く、満尋一人が悪目立ちすることはなかった。基本的に農家出身の者はその生活からか、読み書きが苦手という者が多かった。

現代で受験生だった満尋には、勉強をするということ自体はあまり苦ではない。何に使うのか分からない三角比や虚数の計算に比べれば、くずれた草書体や旧漢字、算盤の使い方を覚えるなんてよっぽど有意義で容易いことである。十壱も商家出身だということで、この辺りは得意らしい。よく部屋で満尋の復習と一緒に付き合ってくれる。問題は勘吉と二之助だ。二之助は単純に勉強が嫌いだけでなくちゃんと教えればできるのだが、勘吉に至っては問題外である。とことん相性が悪いらしく、机に向かえばすぐに夢の世界へ旅立ってしまう。勉強を教えているのは？衆でも上の方にいる京太郎という男なのだが、何度彼の雷が落ちたことか。？衆では時間に厳しいことと有名な彼は、豊富な知識を見込まれて新米の教育も任されている。理性的な人間なのでそうそう感情に走ることはないのだが、勘吉が生徒だと違うらしい。毎夕彼の特別スパルタ補習を受け夕餉の席に現れた勘吉は、稀に見るやつれ具合だった。

「俺もうダメかも。頭の中で算盤の珠を弾く音がする。京太郎さんこえーよ」

大の男がぐすぐすと飯を運ぶ姿は、なんとも鬱陶しいものである。当然それに対する皆の反応も冷ややかなものだ。

「すぐに寝てしまっあなたが悪いんですよ？　むしろ、ご自分の時

間を削つてまであなたに教えている京太郎さんに感謝なさい」

「そーそー、おれだつてちゃんとしてりや分かるのに。脳みそ筋肉なんじゃないの？」

「算盤も結構、新鮮で面白いぞ」

3 対 1。当然軍配が上がるのは満尋たちだ。ぐぬぬぬ、と憤りを飲み込んだ後、勘吉はすばやい動作で二之助の魚をかつぱらった。

「あ！ おい！！」

「脳みそ筋肉だからなー。人より腹が減るんだよ」

奪ったししゃもを頭から豪快にぱりぱりと食う。大人気ないぞ、という満尋の言葉にも耳をかさず、そのまま二之助とじゃれあつて騒がしい夕食が終わった。

今日は満月ということで、満尋は夜着のままお座り岩に腰掛けて書を開いていた。本は京太郎に一番簡単な書物を、と言つて借りたものだ。武士の子どもが読み書きに使う手習い本らしいが、なかなか面白い。もともと歴史小説や昔を舞台にした大河ドラマが好きだったから、こういうものと触れ合えるのは心が躍る。ちなみにお座り岩というのは、井戸の傍に植えられた芙蓉の木の下にある岩のことだ。座るのに手頃な事から皆にお座り岩と呼ばれている。

空には煌々と輝く満月が浮かんでおり、その光は日が落ちれば真っ暗になるこの世界の貴重な光源となつている。その明るさたるや、本が読めるほどであるから驚きだ。月明かりの下で本を読もうなどと、夜も騒がしい満尋の世界では考えもしなかったことだ。

半分ほど読んだところで満尋は本を閉じた。こんなことをしていると、自分にも随分余裕が出てきたように思えて一人自嘲する。今はただ、半月前までのぼろぼろな日常で手に入れた感覚と身体能力を只管磨き続けている毎日だ。体育や部活動とは違う厳しい鍛錬と学校では決して習わない知識と教養、そして賑やかな仲間に囲まれてあつという間に日々が過ぎていく。本当に自分が高校生なのを忘れそうだ。この世界に来たのはほんの一ヶ月前のことなのに。

満尋は感傷的になりつつある思考を止めるために軽く首を振ると、お座り岩に本を預けて井戸へ向かった。水でも飲んで頭を冷やさないと、このままでは眠れそうに無い。

井戸の中になるべく静かに桶を落として引き上げる。この作業も随分と楽になった。井桁の部分に桶を置いて、直接手で掬って水を飲む。ひんやりとした水が喉を潤し、少し気分も晴れやかになる。もう一口、と桶を見たところで満尋は信じられないものを見た。

桶の中から女の子がこちらをじっと見ている。なんのホラーだろうか。水面に影が映りこむように、女の子の顔が水面に揺らめいているのだ。それも随分はつきりと。靈感なんてないから幽霊なんて生まれてこの方初めて見る。じっと目をそらせないまま見ていると、あまりその幽霊が幽霊らしくないことに気が付いた。好奇心旺盛な瞳は生気に満ち溢れてとても死者とは思えないし、顔だつて健康的なものだ。緩く一つにまとめた長い髪の毛を前に垂らして、前髪には年頃の娘らしくピンクのヘアピンでおしゃれをしている。

（は？ ヘアピン？）

それはこの世界ではありえないものだ。夢でも見ている気がしてその鮮やかなピンクから目を離せないでいると、水面の少女は満尋の視線に気付いたのか誘導されるように自分の前髪へ手を持っていき、ああこれか、という表情をした。

視線を満尋に戻した彼女の顔が、瞬間切なそうに歪められる。

自分は今、一体どんな顔をしているのだろう。笑っているのか、泣いているのか、はたまた怒っているのか。彼女の表情からでは分からない。

少女がすっとこちらに手を伸ばすと、ひとりでに桶の水が揺れて彼女は消えてしまった。もう少しだけ見ていたかったと思うのは、さっきまで現代のことを想っていたからだだろうか。

十五夜逢瀬 2

翌朝、眠い目をこすりつつ顔を洗いに井戸へ向かうと、手にした桶に昨夜のことを思い出した。手に持ったまま桶をじいとしていると、勘吉たちが不思議そうに満尋を観察する。

「満尋？ 水汲まないんですか？」

「ああ」

尚も生返事で桶を見続ける満尋に、痺れを切らしたのか勘吉が桶を奪い取り井戸に放り込んだ。ばしゃん、と派手な音を立てて桶は勘吉の手により引き上げられていく。

「どうしたんだ？ なんか悪い夢でもみたのか？」

二之助が心配そうに顔を覗きこむ。悪い夢。そうかもしれない。自分は知らないうちに眠っていて、その上現代のことを考えていたからあんな夢をみたのだ。

「話してみるよ。変な夢なんてこの二之助様が笑い飛ばしてやるぜ！ ほーら！」

二之助が準備万端とばかりに胸を張る。確かに、このまま思い悩んでもしょうがないし、一度彼らに笑い飛ばしてもらってすっきりした方がいいだろう。

「……女の子が出た」

間。

どぼんつ、と先ほどよりも重たい音が井戸の中に響く。

せっかく引き上げた桶を再び井戸の底へと落とした張本人は、にやにや笑いながら満尋の背中をばんばんと力任せに叩いた。

「なーんだよ！ そういう夢？ で、やったか？」

「……？ ——違う！」

「まあ、男ばかりですから不満が溜まるのも分かりますよ？ 恥ずかしくありません……」

「だから違う！！」

「それは笑い飛ばせねーな。どんな子？　可愛かった？」

「まあ、普通に可愛いんじゃないか？　ってだから違うんだ！！！」
息を荒げて叫ぶ満尋に三人はわははと大笑いした。何故朝からこんなに血圧が上がる思いをしなくてはならないのか。口にするんじやなかったと後悔していると、十壱が申し訳なさそうに宥めてきた。
「すみません。珍しいから、つい遊んでしまいました。本当はもつと真剣な話なのでしょう？」

そういうと勘吉や二之助もびたつと笑うのを止め、「悪い悪い、つい」と謝ってきた。その一体感はどこで手に入れてきたのか。人をつい、で遊ばないでほしい。満尋はがしがしと頭を掻く勘吉を恨めしげに見つめると、夢かもしれないけど、と前置きをして昨夜の話をしてみせた。

「うーん、それは幽霊でも夢でもなく『影映り』ですねえ。望月の夜はよくあることです」

話を聞いた面々は特に驚く様子も無く、さも日常的なことのよう

に言った。雨が降ったら雷も鳴る、みたいな感覚なのだろうか。
「いーよなー、俺なんて『影映り』で可愛い子が出たことなんて一度も無いぜ？」

二之助が心底羨ましそうに言った。そもそも『影映り』とはなんなのか。満尋には怪奇現象にしか思えないのだが、怖いものではないような素振りだ。勘吉や十壱も経験があるようだし、一体何なのだろう。

「その『影映り』って何なんだ？」

考え込んでいた満尋を他所に、俺はこんなのを見たことがある、だの各々口にしている三人に聞くと皆目を見開いて驚きを隠せないようだった。

「おいおい、本当か？　どんだけお前は世間知らずなんだよ。どんな偏狭の地から出てきたらそんなことが言えんだ」

勘吉は満尋に呆れた視線を送り、二之助は「信じらんねえ」と呟いた。十壱ですらその形のいい口をぽかんと開けている。微妙な空

気に居心地が悪くなつてくると、満尋は視線を彷徨わせて上手い誤魔化し方を考えていた。

「えーと、『影映り』というのは、まあ水面に幻が映ることです。あたしらはその幻の国を『月夜里』やましたと呼んでいます」

十壱は戸惑いながらも簡単に説明してくれた。

「望月の日はとくにその『影映り』が良く起きるので、月見よりもこちらを楽しむ方々が多いんですよ」

「ま、大体は『月夜里』の景色だけで終わるけどな。人が映ることなんて滅多にない」

勘吉がつまらなそうにそれに続けた。それで女の子が映ったと言ったら騒いでいたのか。ビギナーズラックではないが、図らずもレアな体験をしてしまったらしい。

「『影映り』ってそれだけじゃないぜ」

井戸に寄りかかつて言う二之助の言葉に十壱が頷いた。

「移ろうと書いて『影移り』と言う場合もあります。いろんなものが無くなったり、反対に現れたりするんです。無くなった物はきつと『月夜里』にあるんでしょうねえ」

あたしの気に入りの櫛も一つ無くなってしまったんですよ、と十壱は溜息をついた。切なそうなその横顔から察するに、本当に大事だったのだろう。

すると、いくつもの足音が近づいてきて後からぞくぞくと衆徒たちが出てきた。

「おっと、せっかく混む前に来たのにこれじゃあ意味ねえな。お前から急ぐぞ」

それを見て勘吉が破顔した。この勘吉のくしゃつとした笑い顔を見ると、いつも難しいことはどうでも良くなってくる。それは満尋だけではないようで、「いけねえ、いけねえ」と四人慌てて顔を洗った。やってくる顔見知りの衆徒たちに朝の挨拶を交わして、朝餉を食べに食堂へ急いだ。

寄る居待月 1

右肩に激しい痛みがはしって、満尋は思わず膝をついた。腕にびりびりと伝わる衝撃が、持っていた木刀を下へと落とす。

「どうした？ もう終わりか」

目の前で余裕な笑みを浮かべているのは宇木衛門だ。彼はほとんど、と軽く地面をつま先で叩いて、かかって来いと満尋を挑発する。ぐつと歯を食いしばって、まだ震えの残る手で木刀を握ると、満尋はわあっと宇木衛門に向かっていった。

そもそもの事の始まりは本堂での剣術の稽古中であつた。新入りは全員参加。早くから？ 衆に入っている先輩が一人監修について、それは行われた。満尋は同じ新入り仲間の与市と八弥丸と組んで、一対二の形式で手合わせをする。与市は満尋とおそらく同年代の、鉄砲が得意な若者だ。滅多に人と話さない変わり者であるらしいが、その見事な鉄砲の腕前は逆に皆を黙らせるほどである。もう一人の男八弥丸は与市と同室の男で、二十二歳と新入りの中では一番年嵩だ。質朴な男とは正に彼のこと、真つ直ぐなその性格は得意な剣術にも表れている。そんな二人と木刀での模擬試合をしていると、先輩全員を連れた宇木衛門がやってきたのだ。

「全員いるな。急だがお前たちの初仕事が二日後に早まった。その為、今日明日ぐらいは俺たちが一人ずつ付いて、一対一の指導を行う。お前たちにはまだ死んでほしくないからな」

そう言う、新入りのうち数名に新たな木刀が配られた。満尋にも渡されたそれは手に持つとずしりとくる。今までの物よりもはるかに重い。

「これは……？」

「真剣とほぼ同じ重さに詭えてある。初めて剣術を扱う奴は、それを肌身離さず持ち歩け。もちろん真剣を持ったことのある奴は、そ

れを使う必要はない」

つまり、いよいよ実践を強く意識した稽古に移るということか。満尋は渡された木刀を強く握る。本堂の中は静まり返っていた。隣の方でぐくりと、唾を飲み込む音が聞こえる。新入りの三分の二くらいが緊張した面持ちで、宇木衛門の言葉を聞いていた。残りは普段通りか、楽しそうな顔をしているか。その違いは真剣、もしくはそれ以外の武器で人と対峙したことがあるかどうかだろう。前の方にいる与市はあまり興味の無さそうな、ぼーとした表情をしているし、八弥丸は使命感に燃えてはいるものの、特に緊張しているという感じはしない。きつと二人は三分の一の人間なのだ。

「では、それぞれ誰がつくかは籤で決める」

そうして籤引きの結果、満尋には？衆の頭 宇木衛門がつくことになったのだ。

それからは指導者に付いて各々解散した。満尋だけは宇木衛門が動かないので、そのまま本堂に残っていたが。

「俺たちはどうするんですか？」

「そうだな。……では鬼ごとでもするか」

「は？」と満尋は聞き返した。皆が一人一人訓練をつけてもらっているのに、何故自分は鬼ごとなどで遊ばなくてはならないのか。宇木衛門は木刀を手にして、「これから俺は明鵠寺を適当に歩く」と言った。明鵠寺というのは、この？衆が拠点としている古寺の寺名だ。随分昔に寺としての役目は終えているのだが、今でも町の間を含めてここをそう呼んでいる。

「お前は俺から一本取れば良しとしよう。好きに討って来い」

「十数えたら動いていいぞ」と宇木衛門は本堂を後にした。つまり鬼役は自分がやるというわけか。本当の遊びでなくて良かったと、一息ついて十数える。頭なんてやっている人間だからめちゃくちゃに強いに決まっている。初めて宇木衛門に会った時を思い出して、満尋は身震いした。一本取れるだろうか。

——八、九、十！

本堂を駆け出して外に出ると、当然だが宇木衛門の姿は無かった。敷地内のあちこちで稽古をしている衆徒を見ながら、どこへ向かったかを考える。本堂から出て正面は、正門まで何も無いので隠れるところも無い。となると、裏へ回ったかとそちらへ行くと、意外と早くにその姿を見つけることができた。

隠れるでもなく走るでもなく、本当にただ歩いている。警戒している様子もなく、満尋以外のものが見ればただの散歩に見えるだろう。満尋は木刀を構えて彼に向かって駆けていくと、「何してんの？ 満尋」と声がかけられた。

どうやら稽古中の衆徒が気になって声を掛けたようだが、その所為で宇木衛門は気付いたようだ。満尋を見てふっと笑うと駆け出して見えなくなってしまった。ちつと舌打ちして後を追いかけるが見失う。そこで満尋は気付いた。どうやら、隠れなければならないのは鬼の方らしい。

庭の植え込みに身を潜めながら、満尋はじつと宇木衛門の様子を窺った。立てば腰ほどまである植物たちは、低く伏せた満尋をすっぽりと覆い隠してくれる。宇木衛門はかつて僧房と呼ばれていた、衆徒が寝泊りしている長屋風の建物の階に座^{はし}って、稽古中の衆徒の様子を見ているようだ。はつきり言って、正面から向かっていったところで宇木衛門から一本取れるわけが無い。こちらはまだ剣術を始めて十日も経っていないのだ。少々卑怯でも不意をつくぐらいしないとの鬼ごとには勝てないのだから、ハンデと思ってもいいだろう。ただ、こっそり近づくには他の衆徒に見つかってはいけない。先程の二の舞になるからだ。

できるだけ足音を忍ばせて背後にまわる。まだ距離が開いているので油断はできない。植え込みから離れて縁の側に移動し、静かに上がると、誰にも気付かれないように気配を殺して徐々に距離を詰めていった。こうして気配を殺していると、あの町人から逃げ回っていた日々を思い出す。あの頃自分は何を考えていたか。

——絶対に見つからないように。殺されてしまうから。もっと、もっともっと野生になれ。

肩を狙って振り上げた木刀は、素早い動作で横に薙ぎ伏せられ、腕、肩と続いて鈍い衝撃がやってくる。

「くっ……」

カラン、と木刀を落とすまで、満尋は自分に何をされたか分からなかった。

寄る居待月 2

時刻を告げる鐘が七回鳴る。昼七つ、現代では午後四時過ぎくらいだろう。今日が夕食当番でなくて良かった、と心底思っていると冷やりとしたものが腕に当てられた。

「……っつ！？」

「はーでにやられたんべなあ。ちいっと我慢しろー」

六郎が湿布のようなものを貼り付けたのだ。初めて会った時のように、六郎が手早く手当てしていく。本堂には多くの衆徒たちが集まり、それぞれ治療されていた。

結局最後まで一本も取ることができなかった満尋は、宇木衛門にこてんぱんに伸された。それにしてもまったく歯が立たなかった。本当に人間だろうかと思うほどだ。

「おめーも運がわりいなあ。宇木衛門もちつと加減しねえか」

六郎は満尋の後ろにいた宇木衛門に小言を漏らすと、これで最後と腹に湿布を貼って軽く叩いた。

「ん？ なかなか良い気配の殺しっぷりだったからな。やはり、連れてきた甲斐があった」

宇木衛門は反省の様子もなく、一人満足そうだ。こちらは体中木刀で思い切り打たれて、打ち身だらけだというのに。治療のために脱いだ上半身を整えて「どういうことですか？」と聞くと、後ろで胡坐をかいていた宇木衛門は、口元に手をやり可笑しそうに笑った。彼は時々このような笑い方をする。それは見るものをぞつとさせるが、同時に人を引きこんでいくのだ。眼球の僅かな動きですら見逃すまいと、目を逸らせなくなってしまう。

「なに、あの時のお前は正に飢えた獣のようだな。まだまだ未熟だが、？衆に入れてみるのもいいだろう、と。型通りの剣術ばかりではつまらんからな」

そう抜け抜けと言う宇木衛門を六郎は呆れた目で見ていた。いつ

ものことなのだろう。一見彼は実直な男に見えるが、それは違つと満尋は感じていた。先程彼は自分を飢えた獣と称したが、獣のようなのは宇木衛門の方だ。狡猾な思考と鍛え抜かれた身体。行動は慎重かつ大胆に。群れを率いるその姿は、差し詰め狼といったところか。つい忘れがちだが、彼は力でもって自分たちを制する雄^{リーダー}なのだ。「あのぎらぎらした目は良かったぞ。仲間は大事にすべきだが、あまり丸くなつてくれるな」

彼は満尋の頭をがしがしと掻き撫ぜると、「明日もしごくからな」と本堂を後にした。その姿を見送りながら、満尋は撫ぜられた頭を手櫛で直した。一体彼は自分に何を期待しているのだろうか。

いつもはあちこちで明かりの点いている衆徒の長屋も、今日ばかりはすぐに真つ暗になり、そこかしこで鼾が聞こえた。散々しごかれたのは自分だけではないらしい。部屋の戸をそつと開けると、衝立の向こうから十壺が声をかけた。

「まだ寝ないのです?」

「ああ、目が冴えてるみたいだ。本でも読んでくるよ」

衣擦れの音がして、十壺が起き上がったのが分かる。手に持った本を見せると十壺は「熱心ですね」と笑った。

「部屋でどうぞ」

「いや、明かりをつけたら寝にくいだろう。……外の方が静かだし」とすると、まるで満尋に抗議するかのように、勘吉は「がー」と、掃除機のような鼾を立てた。それを聞いていた十壺は「あまり遅くならないように」と、一言添えて布団に戻った。

しかし、満尋は本当に読書をするつもりで外に出たわけではない。ただの口実だ。今日は彼女との約束があるから。

満尋は『影映り』のことを聞いた後、気になつてずっと向こうに呼びかけていたのだ。今までの満尋だったらそんなものは信じないし、試したりもしないのだが、実際にこの目で桶に映る少女を見て

いる。『月夜里^{やました}』がどんな所かは分からないが、とにかくあの女の子にもう一度会ってみたい。そして今度は話もしてみたかった。少なくとも、あの子は現代となんらかの繋がりがあるような気がするのだ。

満尋は桶の水ではなく、もっと大きな水のある場所を選んだ。丁度、長屋の裏に手入れの行き届いていない荒れた場所がある。そこには隠れるように2m四方に収まる小さな池があるのだ。満尋は暇さえあればその池に呼びかけていた。

そして、『月夜里』の「ヘアピンの彼女」には意外にも早く会うことができた。昨日の夕方、薪割りの仕事が早く終わったので池に呼びかけたところ、返事があったのだ。

「はい、ここにいます」

と、応えた彼女は満月の少女と同じ子だった。落ち着いた色の小袖に、前掛けを掛けている。そして前髪にはピンクのヘアピンが咲いていた。向こうで同じくこちらの影を見たであろう彼女は、柔らかに満尋に微笑んでいた。

会いたいと思っではいたものの、何を話すかはまったく考えていなかった。満尋はしまった、と思いつつも何か話題が無いか考えていると、突然彼女は、自分は伊月だと名乗り、なんのケーキが好きかと聞いてきた。は？　と思うが満尋も自分の名前を教えて「甘いものは好きじゃない」と答えていた。ちなみに彼女はガトーショコラが好きらしい。なんの意味もないような会話だが、これで彼女が自分と同じ現代人であることが判明した。

一度会話が始めると、その後は途切れることがなかった。お互いに気持ちが高揚していたのだろう。彼女は頬を染めてなにやら一生懸命だった。

さらに質問していくと、彼女は平成生まれの高校生で、二つ年下であること。ひと月前『月夜里』にやってきたという彼女は、おそらく自分と同じような状況であることも分かった。ただ、話を詰めていくと、どうも彼女はあまり自分の周りのことに無頓着だったら

しい。どこの国にいるのか、今何年なのか、誰が領主なのか答えられなかった。領主といえ、彼女はこちらのことを『春日部』と呼んでいたのが少し気になるが。とはいえ、この三つは『月夜里』とこちらの関係を知る重要な手がかりになる。「宿題」という形で、彼女に調べてもらおうようお願いした。

それから、同時に時鐘が鳴ったことで時間の流れが同じだったことも分かった。少々興奮してそのことを告げると、伊月は「満尋ってすごいね」と、素直な、きらきらとした尊敬の目を向けてきた。あまりに真っ直ぐ見つめるものだから、つい目を逸らしてしまった。絶対顔が紅くなっているに違いない。実際、水面の向こうで笑われた。

今日は、昨日自分が出した「宿題」を彼女は持ってきてくれるはずだ。急がなくてもいいのだが、申し訳なさそうにしていた彼女のことだ。きつとすぐに調べてきて自分に持つてくるだろう。池の縁で膝を立てて座ると、満尋はまだかまだかと『影映り』の兆候を待った。

寄る居待月 3

立膝をついたままうつらうつらとしていると、池の水面が揺らめいた。昨日も見た『影映り』の兆候だ。夜五つを少し過ぎた頃だろう。八時くらいだろうか。「こんばんは」と現れた伊月にこちらも「こんばんは」と返した。

「さっそくだけど、国のことか聞いてきたよ」

ほら、やっぱり。伊月が予想通りに話を持ってきたので、思わず口元が緩んだ。本当に素直な子だ。こんな子がよくこの世界でやっていったな、と思う。

「聞かせてくれ」

「えつと、まず私のいるところは『わくれ』っていう国」

『別暮』。つまり、同じ国ににいるということが。すると彼女は「でもね」と話を続けた。

「満尋の所と漢字が違うの。私の国は、山に支えるっていう字と、呉服とかの呉の字で『？呉』っていうの。それで、満尋の国は無いって言われた」

同じ音でも漢字が違う、か。確かに自分も主だった国は調べてみたが、そのような国は無かった。ふむ、と手を唇にあてて考えるが、これだけでは何も分からない。

「それで、他には？」

「領主の名前は『やました きよひろ よしたか』」

出た。ここでも同じ音の名前。たぶん、これも漢字が違うとかそんな感じだろう。満尋たちは彼女のいる所を『月夜里^{やました}』と呼び、領主の家名が『やました』。伊月は昨日こちらの世界を『かすかべ』か、と聞いてきたが、こちらも領主の家名が『春日部』である。偶然と片付けるには出来過ぎている様な気がする。

「最後に、今は天輝四年の八月十八日だよ」

こちらも八月十八日なのは同じだが、元号は元呈五年だ。これは

違うようだねと、自分の思考に耽っていると、水面の向こうの伊月が不安そうにこちらを見つめていた。

「満尋は普段何をしてるの？」

おそろおそろ、といった様子で伊月は尋ねる。少しばかり自分の世界に入りすぎてしまったようだ。向こうにばかり話させるのは悪い。

「俺は？衆っていうところに入れてもらってる。傭兵集団っていうたら分かるか？ そんな感じだ」

「危なくないの？」

心配そうに伊月が言う。それはまだ分からない。なにしろ稽古しかしてないのだから。でも、何れは戦に駆り出されるようになるだろう。宇木衛門が？衆を惣として強くしたいのなら。とりあえず「今のところは」と答えるしかない。

「まだ、仕事はもらってないけど。今は剣術や馬術……の基本を教えてもらってる」

馬術か……。馬で思い出すのは勘吉しかない。もう、あんな適当な指導も突発レースもごめんだ。あれからも、馬術では彼のめちやくちやな行動に振り回されているのだ。ついこの間のことを思い出していたら、伊月がなにやら慌てて話題を変えてきた。

「わ、私はね、こっちに來て扇子屋さんに拾ってもらったんだ。売るだけじゃなくて、最後の仕上げもしてるんだよ」

そういうと伊月は扇子作りの話や、そこでお世話になっている人たちのことを話し出した。こちらは男ばかりでほとんど明鵠寺を離れないから、職人や町の人たちの話は新鮮だ。

「その息子さんね、まだ十歳なんだけどすごく大人びてるの。絶対会ったら満尋もびっくりするから、しっかりしてて。でも、私妹みたいに思われてて……」

年上の威厳が、と落ち込む伊月には思わずははっと笑いが零れた。伊月じゃ、まず年上の威厳なんてものは出せないだろう。だいたい、二十歳まで子どもとして扱われる現代人と、幼い頃から親の仕事を

手伝い、十五にはほとんど元服するこちらの人間とではすっかり度は違うに決まってる。そう言えば、「それはわかってるけど……悔しいじゃん！」と伊月は口を尖らせた。

他にも続く伊月の話に満尋は自然と微笑んでいた。

「伊月は、いい人たちに出会えて良かったな」

心からそう思う。自分はここの生活に来るまでいろいろあった。高校生という自分を手放して、物を盗んで、人から追われて毎日を過ごした。いい人になんて出会わなかった。

伊月は「うん」と笑顔で頷くと、「満尋もそうでしょう？」と尋ねてきた。その言葉を聞いて、満尋は自分の笑顔が凍りついたのを感じた。

きつと彼女はすぐにその「扇子屋」に世話になれたのだろう。あんな地獄のような日々は知らないのだ。満尋が「そうじゃない」とは思ってもいないのだろう。でも、それで良かったとも思う。正直、嫉ましくはある。羨ましい。自分もそうだったらどんなに良かったか。でも、「そうじゃない」自分はここで新しい生活を手に入れることができた。辛いだけの日々は、あの日宇木衛門に遇った時に終わったのだ。だから、伊月が自分はずいぶん？衆に世話になったのだと思ってるのなら、それでいいと思う。自分がどんな目に遭ってきたかなんて、言う必要はないのだ。

この女の子が酷い目に遭わなくて、本当に良かった。

「？衆の人たちは違うの？」

満尋の表情が変わったのを、伊月は？衆の人たちが原因と勘違いしたようだ。それは違う。彼らにはとても救われているのだ。

「？衆の人達は、本当にいい人ばかりだ。あの人達がいるから今の俺がいる、と思う。男ばかりだし、莫迦で変な奴も多いけど」

「……そっか」

そう言つと伊月は安心したようだった。それから会話が途切れてしまう。その隙間を通るように風が吹いて、茫茫に伸びた草が満尋の腕や足をくすぐった。もし、自分がクラスのムードメーカーみた

いに話し上手であれば、上手く話を繋げる事ができただろうに。すると、伊月が新しい話を持ち出してきた。少々無理やりな話題転換にも渡りに舟と乗っかれれば、彼女は次第に嬉しそうに日常の話を始めた。そういえば、昨日から話の切欠はいつも彼女からくれる気がする。

ほとんど聞き役にまわっていると、彼女を映している水面が少し暗くなった。それに気付いた伊月は、あ、と後ろの方を見る。明かりが何かを置いていたのだろう。どこで『影映り』をしているのかわらないが、あまり遅くまで外にいさせるのは危険だ。

「もうそろそろ寝た方がいいな」

と言うと、とても残念そうにしたのを内心嬉しく思いながら、「ほら、お開きにするぞ」と促した。

「明日も『影映り』できるか？ ちょっと実験したい」

少し気になることがある。昨日今日と同じ場所で『影映り』をしたが、はたして場所が変わっても同じように伊月と話せるのか。

「明日は俺が別の場所から『影映り』を試してみる。ただ、上手いのかは分からないから、明後日も同じ時間に会おう。その時は今居る所からするから、伊月もそうしてくれ」

「わかった」

「よし。じゃあ、また明日。……上手くいけばな」

小さくそう付け足せば、伊月はふふふ、と笑った。

「うん、またね。おやすみなさい」

「……おやすみ」

今日は伊月にばかり話させてしまった。ころころ変わる表情と語る話が面白くて、つい聞き役になりっぱなしだったのだ。明日はこちらも何か話題を用意しておこうと心に決めて、『影映り』を終わらせるべく水面に触れた。

更待月の陰 1

満尋は、今日も宇木衛門に散々扱かれた重たい体を引きずって、食堂の裏口から厨に入って行った。今は夜五つ。日のあるうちは、衆徒たちが当番制で飯を作り賑わう厨も、今は誰にも利用されることなく、辺りはひっそりと静まり返っている。器用に高く積み上げられた、大量の皿や盆に触れないように気をつけて、奥の竈の方へ移動した。火を点けた灯明皿を竈の上に置いて、甕の蓋を開けると、中には井戸の水がたつぷり張られていた。

ここへ来たのは、昨日伊月に話した実験をするためだ。伊月はいつもと同じ場所、自分は池を離れてここから『影映り』をする。それで、どうなるのか調べるのだ。一度目は桶の水に映ったのだから、甕の中の水でも大丈夫だろう。満尋は暗い水に向かって呼びかけた。「おい、誰かいるか？ 伊月？」

しかし、水面はゆらりとしめない。何度か呼びかけながら、息を吹きかけてみたり、指を突っ込んでみたりしたが変化は起きず、伊月の影は映らなかった。

「駄目か。……場所を変えてみるか」

それから、満尋は思いつく限りの水場を訪れた。井戸、裏山から流れてくる小川、はたまた風呂場まで。しかし、どの場所でも『影映り』の兆候は一向に表れず、最後の井戸を試し終えてお座り岩に腰を下ろした。今からいつもの場所で『影映り』を試みようか。そう考えていたら、じじ、と皿の火が大きく揺らめき、明かりが一気に小さくなった。皿の中にたつぷりと入れてきた魚油が、すっかり無くなっている。これは、一時間半から二時間は経っている。両手を後ろについて、流石にもう待っていないだろうな、と諦めると僅かな火を頼りに部屋へ戻った。明日はとうとう初仕事だ。昼からなので午前中は自由なのだが、夜更かしするほど胆は大きくない。二人を起こさないように、細心の注意を払って布団に入った。

昼九つの鐘が鳴る。少し早めの昼食を町で済ませた満尋たちは、町の西側の街道に集まっていた。集まったのは九人。皆ほぼ同じ時期に入った新入りだ。

「ひい、ふう、みいっと。……よし、全員いるな」

九人の中では一番利発な孫太夫が場を仕切る。八弥丸より一ツ年下の彼は、この中で二番目に年長だ。八弥丸はリーダータイプではないし、まとめるのは得意ではないと本人が言っていたので、孫太夫がまとめ役を引き受けたのだ。彼は皆をゆつくりと見渡すと、緊張した面持ちで口を開いた。

「頭から頂いた仕事は、私たちでこの辺りに出没する賊を退治することだ。奴らは、最近この街道を通る商人や旅人を襲っている。ここは真田町しんたと隣の太木町、仲主村なかすが繋がる重要な街道だ。心して掛かるう」

孫太夫はきりつとした太い眉毛を真一文字にしてそう言った。「おう」と皆が頷くと、少し緊張が解れたのか表情を緩め、荷物の中から褐色の帯を差し出した。

「なんだい？ それ」

満尋と同じ年だという主膳しゅでんが尋ねた。開いているのか閉じているのか、いまいち良く分らない目が、何に使うんだと訴えている。

「うわっ、お前起きてたのか」

「酷いなあ、勘吉さん。貴方だつて珍しく静かだったじゃないですか。てつきり偽者が紛れ込んだのかと思いましたよ？」

主膳の隣にいた勘吉が大げさに驚いてみせると、主膳は心外だとばかりに眉をひそめた。しかし、勘吉が驚いたのも分かるのだ。彼は黙っていると本当に寝ているように見える。

「ん？ ただの帯じゃん。これホントにどうすんの？」

二之助の隣にいた新左衛門が、褐色の帯を持ちひらひらと振っている。「あっ」と孫太夫が手の帯を確認して、いつのまに、と呟いた。まだ大人になりきっていない、細い体をした新左衛門は、くく、

と笑って「おいら^す掬るの得意だし、朝飯前。あ、もう昼餉が済んでるから夕飯前？」と軽口をたたいた。何言っているんだ、と周りが笑い出すので満尋が、

「で、本当にどうするんだ。それは」

と、口を挟んだ。話を進めてくれ。

「こほん。これは？衆の証、だそうだ。袴の上から巻いてくれ。今後も仕事の時はこれを巻くように」

孫太夫は、新左衛門以外の全員に帯を渡して回る。皆言われたとおりには袴の上から腰に巻きつけると、一同妙な一体感が生まれた。

「なるほど、確かにこれは？みたいですねえ」

腹の帯を撫でてしみじみと十壺が言った。どういう意味だ、と聞いてみると、褐色の帯が鳥の？を思わせるのだそうだ。

「見たことねーの？ 田んぼの上とか飛んでんぜ。鳶に似てるけど、腹にこんな感じで帯模様があるんだ」

二之助が腹の上で手を動かし、帯を示すジェスチャーをする。

「へえ、それで？衆か。面白いな」

「おれも今知った。この帯からだったんだな」

生憎、本物の？という鳥を見たことは無いが、鳶に似ているなら猛禽類の一種だろう。この辺りは一面田んぼだから、空に注意していれば見つけられるかもしれない。

すると、ぱんぱんと二拍手の鳴る音がして、孫太夫が皆の注意を自分に戻した。そろそろ出発のようだ。

満尋の腰には、初めて持つ本物の刀が差してある。宇木衛門は、けして稽古中は本物を使わせてくれなかった。ただ、抜き差しの仕方だけ教えてもらう時に、ほんの少しだけ持たせてくれた程度だ。勘吉などに聞いてもそれは同じらしく、八弥丸のように始めから剣術を身に付けていた者意外は、皆真剣を差すのは初めてのようだった。

歩き出す皆の後ろで、満尋はそつと左手で柄の頭を撫でた。そこから、冷やりとした温度が手に伝わって、ごくりと唾を飲む。

（これが、人を殺す道具……）

以前、自分の首筋に宇木衛門が当てた鋭い刃。あの時の冷たさを思い出して体が震える。満尋は、きっと自分はこれを抜けないだろうと感じていた。

更待月の陰 2（前書き）

グロテスクな描写があります。
苦手な方はご注意ください。

更待月の陰 2

賊を追って満尋たちは街道から外れ、山の中へと入っていた。好き勝手に生えた枝や蔦を棒で払いながら進んでいく。

「頭の話だと、この辺りだな」

孫太夫が地図を広げて辺りを見渡した。木々が鬱蒼と茂り、まだ昼間だというのに薄暗い。宇木衛門たちが先に下調べを済ませているらしく、この辺りに賊が潜む拠点があるとのこと。孫太夫の提案で、三人一組で分かれて搜索することになり、満尋は気心の知れた勘吉、十壱と組んだ。

「なあ、俺たちだけで、何とかなれると思うか？」

皆と十分離れた所で満尋はそう口にした。自分を入れて九人。相手が何人いるかしれないが、こちらには素人も混ざっている。対峙しても無事でいられるだろうか。

「そうですねえ、あたしも言ってみれば今日が初陣ですから何とも……。ただ、宇木衛門殿はしっかりと調べてあたし達に回してくれたのですから、何とかなると信じるほかありません」

「ま、今日までいろいろ俺たちも鍛錬してきたんだし、すぐにやられたりしねえよ。そう思っとけ」

十壱と勘吉が心配するな、と満尋に言う。確かに、ここで怖気づいて帰るわけにはいかないのだから、勘吉ぐらい気楽に考えた方がいいのかもしれない。悩んでいないで、自分も何か賊の手がかりを掴もうと、満尋は首を巡らした

しかし、薄暗い山の中はほとんど視界がきかない。ただでさえ自分は眼鏡に頼っているのだから、ここは他の器官を使った方が良さそうだと満尋は判断した。すう、と意識を切り替えて耳と鼻に集中する。頭の遙か上の枝では鳥の囀りが、少し離れた所では小さな獣が草を踏む音が聞こえてくる。どんな異変も見逃すまいとしていると、煙の臭いが鼻を衝いた。上を見上げると、細い煙が天に伸びて

いる。狼煙だ。

「お、なんか見つけたか。あつちは誰だろうな、八弥丸たちか？」

三人で狼煙の昇った方へ向かうと、孫太夫と八弥丸、与市がそこに居た。しかし、満尋は近づいたびに煙とは違う不快な臭いを感じていた。それは、二人も同じだったようで、顔をしかめている。すぐ後から残りの三人も追いつき、全員が揃った所で与市がおもむろに持っていた棒で藪を開いた。

「うっ」

むわっ、と辺りに強烈な臭いが広がる。何かが腐っているようなとにかく酷い臭いだ。与市は鼻と口を袖で覆い、この臭いの中眉一つピクリとも動かさずに、顎で棒の先を見るよう促した。皆嫌な予感しかしなが、それでも近づいて藪の中を覗き込む。

その瞬間、満尋は己の口を手できつく押さえた。そうしないと、悲鳴も、胃の中の物も、全部出てきてしまいそうだったから。

そこには、腐乱した死体が転がっていた。体つきからおそらく女のものだろう。衣も何も身に纏っておらず、髪の毛は根元からばっさり切られていた。そんな死体が、一つ二つ、全部で六体ある。ぱっくりと開いた傷口には、何かの卵が産み付けられ、そこから孵化した幼虫が這い出し蠢いている。顔は無残にも鳥か何かに啄ばまれたのか、ただ目鼻の位置が分かるのみ。五体が揃っている者はいなかった。

「この向こうに賊が使っているらしい獣道を見つけた。おそらく、その先に拠点としている場所があるはずだ」

八弥丸が厳しい顔をして言った。信じられない。同じものを見たはずなのに、八弥丸は少しも顔色を変えてはいない。満尋は目線を逸らし、ふらふらと後退すると、後ろにいた勘吉にぶつかった。「悪い」と血の気の失せた顔で見ると、勘吉は顔をしかめながらも、その無残な死体を真っ直ぐに見ていた。

「ああ、大丈夫だ。って、お前が大丈夫じゃないな。あつちで吐いとくか？」

少し離れたところを指差して、勘吉が控えめに肩を支えた。首を横に振って返事とすると、「無理するな」とそのまま後ろに回される。嫌な汗が噴出すのが止まらない。気合で吐くのは何とか堪えると、揺れる視線で他の人間にも目を向けた。一番年下の二之助や、新左衛門でさえ、青い顔をしながらもしつかりと立っている。自分は、肩を支えてもらってやっと立っていられる状態だというのに。この違いは一体なんだ。

「私たちはもう少し奥へ行ってみるが、満尋はどうする？」

孫太夫が心配そうに満尋に尋ねた。この先もつと過酷な状況になるかもしれないと、死体を見ただけで蒼白になる満尋を案じての質問だろう。

「いや、大丈夫だ。行くよ」

肩を支える勘吉の手をやりわりと押しやって一人で立つ。まだ気分が最悪なのに変わりはないが、ここで一人残るような情けない真似はごめんだ。ほとんど意地だけで立っていると、くん、と袖を引かれた。与市だ。

「……駄目なら帰った方がいい。この先は戻れなくなるかもしれない」

「戻れない？」

与市はそれだけ言うと、八弥丸の後について死体の向こうの獣道へ入っていった。彼は支給された刀ではなく、自前の火縄銃を一丁抱えている。腕前が達者だというそれは、遊びでもなく、見世物でもなく、道具本来の目的の為に使われる。彼とは同じ年らしいと聞いていたが、その十八年はきっと自分とはまったく違う年月だろう。初めて耳にした彼の声は、流水のように満尋の中に入ってきて、脳に染み渡った。それでも、忠告は聞けない。どこに戻れないのかは分からないけれど、一度「行く」と口にしたから帰るつもりはなかった。戻りたくないのは、あの最初の半月だけなのだから、進んでも後悔はしない。結局はこのまま、一人駄目になりたくないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4994w/>

水面の月～The Reverse Of The Girl～

2011年10月12日07時08分発行